中国古典小説研究の展開
魯迅から小川環樹へ

楊 維公（YANG Weigong）*

本発表では中国と日本の中国古典小説研究の先駆者である魯迅と小川環樹の主著の比較を通じて、中国古典小説研究成立初期における日中の研究の特徴と異同を把握してみたい。

中国の古典小説は悠久の歴史を有し、古くは『漢書』「芸文志」にすでに「小説家」の記録が見られるが、それを専門的に研究する歴史はさほど長くなく、専門史が現れてからまだ百年が経っていない。初期の中国小説史研究というと、まず魯迅を言及せねばならない。魯迅は『中国小説史略』を著し、中国小説の研究を一研究分野として立ち上げた。本書はまさに中国小説史がまだ成立していなかった時代に現れた啓蒙的な作品といえよう。本書は時代順に上古から清末までの小説史を叙述する。同じ時代の小説を題材によって章を分けて述べることもある。その中心となる思想は、俗文学の代表である小説が中国に久しくしかも絶えず存在し、そしてそれぞれの時代における社会の様子を反映しているとのことにあると窺える。『中国小説史略』は文学革命という大きな背景の中で世に出た。本書は白話を広げようとする文学革命の意図と密接に関わっているといってもいいだろう。

一方、およそ 30 年後に日本で現れた小川環樹の『中国小説史の研究』は通史ではない。本書は中国小説におけるいくつかの問題をめぐってテーマを立てて叙述する。中には『三国演義』や『水滸伝』、『西遊記』についての専門的な論文のみならず、「白話小説の文体」や「中国小説におけるリアリズム」、「古小説の語法——特に人称代名詞および疑問代名詞の用法について」など文法や文体に関する画期的な論文も収録されている。本書は元々小川の博士学位論文であったためか、『中国小説史略』よりも専門性が強く、そして近代日本中国学の伝統である実証を重んじる気風をよく受け継いだことも窺える。また特筆すべきなのは、文学研究に語学研究を融合させた点も本書の一つの大きな特色である。

出発点が違うとはいえ、執筆している時、小川はかなり魯迅の本を重視していたようである。序文には「魯迅氏の著書は京大在学中にすでに読んでいたが、この年にはたえず座右に置いていた」[1]とある。実際小川は魯迅に会ったこともある。二人は 1935 年 3 月 21 日に上海の内山書店で初対面した。小川本人の回想によると、「そのとき何を話したか詳しいことは憶えてませんのですけれども、ただ一つそのときだったにちがいないと思うのが、『中国小説史略』を書いたときの話」[2]ということである。この回想は 1985 年 2 月『飈風』第 18 号に見られ、魯迅と出会ってからすでに 50 年の歳月が経った。その時魯迅が言った『中国小説史略』についての話は小川にどれほど深い印象を与えたかは容易に想像できよう。小川環樹が日本で中国文学を研究していた時、中国にすでにあった研究を受け入れながら、「中国」というフレームの外に立ち、実証主義を基に比較的客観的に中国と異なる研究を行っていたといえよう。これは京都大学の中国文学研究の特色でもあるかもしれない。

筆者は日本中国文学研究ないし海外中国文学研究と中国での中国文学研究を比較することによって、中国文学研究分野に応用できる新たな方法を見つけ出すことを目指したい。

---

* 京都大学文学研究科中国語学中国文学専修博士後期課程。

[1] 小川環樹「『中国小説史の研究』序文」、『中国小説史の研究』、東京：岩波書店、1968 年、vi 頁。「この年」とは小川氏が東北大学に赴任し、中国小説史を講じる第一年である。

[2] 小川環樹「留学の追憶——魯迅の印象その他」、『飈風』第 18 号所収、宇治：飈風の会、1985 年、3 頁。